WRV NEWS LETTER

WILDLIFE RESCUE VETERINARIAN ASSOCIATION

特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会

No.138

2026.9.30 発行

野生動物救護獣医師協会は、保護された傷病野生鳥獣の救護活動を通じて市民の野生鳥獣保護思想の高揚をはかるとともに、地球環境保護思想の定着化を目指しています。そのために、常に世界の情勢を学び、会員相互の連絡、交流を行い、治療、研究および知識の普及をはかり、社会に貢献していくことを目的としています。

No.138 目次

Refeeding syndrome（RFS：再栄養症候群）に陥らせないための推奨給餌法 ・・・・・・・・・・・・・・2-7
本州初のトキの放鳥、そして村本義雄氏の功績・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8-10
シジュウカラについて ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
事務局日誌 ・・・11-12

Refeeding syndrome（RFS：再栄養症候群）に陥らせないための推奨給餌法

～鳥類救護（特に海鳥・水鳥）で推奨される国際的な標準方法～

WRV 副会長／大阪支部長　中　津　　賞

Ⅰ．最初の 24-48 時間：給餌しない ／ 非経口栄養のみ

脱水、ショック、低電解質の補正が優先。

● 使用するもの

等張電解質液：Lactated Ringer's, Normosol-R

2.5%ブドウ糖加等張性リンゲル(等張糖加リンゲル液『KS』・等張リンゲル糖-V 注射液)

重度衰弱では、5%ブドウ糖加等張性電解質液(ハルトマン D 液)を慎重に

〇ショック症例は静脈 IV あるいは骨髄内輸液(IO)：鳥では IO 輸液が簡単で、重症例にはゆっくりと点滴し、水様性利尿が観察され時点で、IO は中止して、咽喉等反射が回復していれば、経口投与に変える。軽症例なら皮下輸液。

● 追加

ビタミン B1（チアミン）補給が必須（海鳥は特に）：10-25 mg/kg IM：生食水で希釈すれば皮下注射できる。

Ⅱ．24-48 時間後：少量から経口給餌開始

初回のカロリー

- **必要量の 25%以下。** 低脂肪・低糖質・中等度タンパクの流動食（例：海鳥なら魚ベースの薄めた流動食）。
- 特に **EmerAid の魚食性用フォーミュラ（Piscivore）**は、弱った海鳥の初期安定化食として使われてきた報告があります。EmerAid+1
- **消化性と調整のしやすさ** – 流動食または粉末をお湯で溶く／薄めるタイプは、消化器官が弱った鳥に負担が少なく、給餌量や濃度を調整しやすいため、「初回カロリーを 25%以下」「低脂肪・低糖質・中等度タンパク」という条件にも比較的合わせやすい。
- **頻度**：少量頻回（4-6 回/日）。
- **電解質補正を続ける**：**血液検査の結果から、**リンを含む輸液や経口投与、リン酸補充を併用することがある。
- **多くの経口栄養剤には必要な Mg/P/K がすでに含まれている。**

まとめ

🔎 **高リスク患者（飢餓状態・急速再栄養予定）**では：

1. **初期栄養投与量を低くスタート**
2. **リン・カリウム・マグネシウムを頻回チェック**
3. **低リン血症が予想／発生時は速やかに補充**（経口 or IV）
4. **必要なら静脈内投与へ切替**（重度例や許容されない低リン血症を示す症例）
   → 経口補給はあくまで **軽度・中等度の補正用** として考えられる選択肢である。Merck Manuals

具体的な薬剤名としては以下のようなものがある。

- **リン酸 Na 補正液 0.5mmol/mL**：ナトリウム塩であり、カリウム過剰投与のリスクを避けてリンを補給したい場合などに用いられる。
- **補正用 0.5 モル リン酸二カリウム液（リン酸 2 カリウム注など）**：以前から使用されているカリウム塩の製剤です。リンを補給する際にカリウムも同時に投与されるため、高カリウム血症のリスクに注意が必要である。

飼鳥のセキセイインコ・オカメインコ・ブンチョウ等で種々の原因で衰弱が進むと、餌を啄んでいるのに飲み込むことができず、空腹が満たされずにいつまでの餌を啄み続けることがある。それでも 1 日うちの数時間は嚥下できると、不足分のエネルギーは大胸筋の筋肉蛋白を動員して、長期にわたって、生きながらえる。こうした慢性飢餓症例は KS(Keel Score)は 1～2であることが多い。飼い主が自分の鳥がよく餌を食べていると稟告で述べても、膨羽して KS1 に近い時はこの**嚥下障害を疑う**必要がある。臨床経験でもよく遭遇し、決して珍しい症例ではない。こうした RFS の懸念がある時の給餌

には上記の点眼瓶の3種(P・K・Mg)の液体を RFS 発症予防の為に、4 時間ごとの給餌時に1滴づつ、添加して与え続ける。オカメインコ程度の 100g の鳥には各2滴が適量である。健康なセキセイインコの平均体重は約45±5であるが、種々の原因で体重が低下して 25g 以下になった症例は従来の治療法(保温と強制給餌)では救命しえなかった。そこでセキセイインコの25g を生存限界体重と名付けた。あるいはオカメインコの生存限界体重は臨床経験的に50g 以下と考えている。今後、生存限界体重以下の症例に、RFS の対策を実施して治療の当たれば救命できる症例が出てくることが期待される。

【体重 500g の鳥が今、RFS に陥り、リンの血中濃度が 2mg/dl を示す時の、リン酸 Na 補正液 0.5mmol/mL は何 ml を iv すれば良いのか？

体重 500g(0.5kg)の鳥に対して、一般的な RFS 時のリン補正量は 0.3～0.6mmol/kg/日とすると、この鳥では必要量は 0.15～0.30mmol/日となる。 0.5mmol/mL のリン酸 Na 補正液であれば、およそ 0.3～0.6mL/日を、モニタリングしながら分割静注する量になる。

実際の投与の考え方:RFS 下で血清 P 2 mg/dL は中等度低値域に相当し、急速補正よりも慎重な連続補正が注目されます。上記 0.3-0.6 mL/日を、補液ラインに添加して、数時間以上かけて投与し、4-6 時間ごとに電解質・臨床症状をチェックしながら加えるのが安全である。

●鳥種・個体差への注意

こうした数値は理論値のため、鳥種ごとの許容上限は不明であり、最小量(0.3mL/日)から開始して再検査で調整する方が安全である。低 Ca 血症や K 異常があれば、カルシウム注との沈殿リスクや K 投与量上限も併せて考慮する。塩化カルシウム剤は他の薬液との混合で沈殿を生じやすい。

鳴禽類・セキセイインコ＿文鳥では給餌ごとに各１滴　流動食に添加
オカメインコ程度の100gには各２滴を。体重に比例して与える。

鳥類救護・Refeeding syndrome 判定用

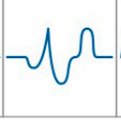
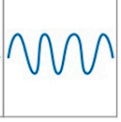
血中リン濃度 換算・臨床評価表（P）

換算式

mg/dL × 0.323 = mmol/L　　P 原子量 30.97）

P (mg/dL)	P (mmol/L)	臨床評価	Refeeding syndrome 対応
< 2.0	**< 0.65**	**重度低リン血症**	！ 給餌延期／即補正（PO/IV）
2.0 – 2.5	**0.65 – 0.81**	中等度低リン血症	⚠ 給餌量 ≤25%、補正開始
2.6 – 3.0	**0.84 – 0.97**	軽度低リン血症	慎重給餌＋モニタ
3.1 – 5.0	**1.0 – 1.6**	**概ね正常域**	通常 refeeding protocol
5.1 – 7.0	**1.65 – 2.26**	やや高値	腎・脱水評価
> 7.0	**> 2.26**	高リン血症	給餌内容・腎機能再評価

K イオンが心機能に及ぼす影響を心電図上で見ると、以下の様である。

カリウム濃度 (mEq/L)	5	7	8	9	10
特徴	正常	高カリウム血症			
	正常	T 波が高い	PQ 延長 T 波が高い ST 変化	心房停止 心室内伝導障害	心室細動
波形					

① リン(P)補正

評価) 2.0 mg/dL = 重度低リン血症 ： RFD では致死的(横紋筋融解・呼吸筋麻痺)リスク

使用薬剤(現場で現実的)

✓ 第一選択(経口・経管) ： リン酸ナトリウム or リン酸カリウム液

(例)人医用:リン酸 Na/K 内用液　調剤:NaH_2PO_4 / KH_2PO_4 溶液

リンの投与量(鳥類救護・OWCN 系基準)

▶ 目標補正量　0.3-0.6 mmol P / kg / 日(分割投与)

▶ 体重 500 g の場合　必要量: 0.15-0.30 mmol P / 日

✓ 実用的投与例(経口)

リン酸溶液 0.3 mmol/mL を使用する場合　1 日量: 0.5-1.0 mL / 日 ： 2-3 回に分割投与

流動食に混和して OK。 ◉初日は必ず下限量(0.3 mmol/kg)から。

●補正(原則:重篤例のみ)

使用:リン酸 Na 注。　速度:0.01-0.02 mmol/kg/hr を超えない。　体重 500 g:最大 0.005-0.01 mmol/hr。

☞ 心停止リスクがあるため、鳥類救護では経口が基本

② カリウム(K)補正

評価) 2.5-3.0 mEq/L:中等度低下　RFD では 不整脈・筋力低下リスク

使用薬剤

✓ 経口(第一選択)塩化カリウム(KCl)内服用 ： 人医用 KCl シロップ　調剤 KCl 水溶液

▶ 推奨投与量　1-2 mEq K / kg / 日(分割)

▶ 体重 500 g の場合　0.5-1.0 mEq / 日　2-3 回に分割

●実用例

KCl 1 mEq/mL 溶液使用時 ： 0.5-1.0 mL / 日　流動食に混和 or 経管投与

リン酸カリウムを使っている場合 → カリ補正量は 合算して計算

●補正(慎重＝K イオンは心筋の興奮起こし、心停止に陥る危険大)

速度上限:0.5 mEq/kg/hr 以下　500 g:最大 0.25 mEq/hr

例、体重 500g の RFD に陥った海鳥が、リン 2mg/dl、カリ中等度: 2.5～3.0 mEq/L の低い値を示す時のリンとカリの補正に必要な薬剤とその使用量は？

重要で実践的な状況 ：

RFD(Refeeding syndrome)進行中の海鳥(体重 500 g)で、P:2.0 mg/dL(≒0.65 mmol/L:明らかな低リン)、K:2.5-3.0 mEq/L(中等度低カリウム)が同時に出ている場合の、現場で使える補正指針のまとめ。

■前提(非常に重要)

RFD では「カロリー増量より先に電解質補正」。リンとカリは同時に低値に移行しやすく、同時補正が原則。

心電図モニタが無ければ 急速補正は避ける。500 g は 小型～中型海鳥(ウミスズメ・小型ミズナギ)想定。

③ 同時補正の実践的まとめ(500 g 海鳥)

☞ 1 日 2-3 回に分割、48-72 時間かけて是正。 必要量を生食水に添加してゆっくりと。

＜電解質＞	＜薬 剤＞	＜1 日量＞	＜実際の投与量＞
P	リン酸 Na/K	0.15～0.30mmol	0.5～1.0ml
K	KCL	0.5～1.0mEq	0.5～1.0ml

④ 重要な併用ポイント(RFD 管理)

Mg 欠乏があると K が上がらない。 $MgSO_4$:25-50 mg/kg/day 併用を考慮。 糖質を急に増やさない。

初期給餌:必要カロリーの 25%以下。

☞毎日モニタ ： P / K / 体重 / 努力性呼吸/ 俊敏さ

■マグネシウムを含有する市販の経腸栄養補助剤

これらは一般的に**総合栄養剤**や**濃厚流動食品**として販売されており、獣医師の処方箋がなくてもドラッグストアやオンラインストアで購入可能である。

エンシュア・リキッド、エンシュア H ： これらはもともと医療用医薬品ですが、獣医師の指示に基づき、薬局で購入することも可能で、マグネシウムを含む様々な栄養素がバランスよく配合されている。

エネーボ配合経腸用液(エネーボ) ： こちらも医療用医薬品ですが、経口・経管両用として利用され、マグネシウムを含んでいる。

エンシュアリキッド 250kcal/250ml たんぱく質8.8g	エンシュアH 375kcal/250ml たんぱく質13.2g	エネーボ 300kcal/250ml たんぱく質13.5g	イノラス 300kcal/187.5ml たんぱく質12.0g	ラコール 200kcal/200ml たんぱく質8.76g
液体タイプの経腸栄養剤の先駆け製品（バニラ、ストロベリー味）	水分の摂取制限がある患者や投与容量を減らしたい方（7種類の味）	たんぱく質やアミノ酸を強化し、食物繊維やオリゴ糖配合（バニラ味のみ）	少量で効率的に栄養素・エネルギーを補給（ヨーグルト・りんご・いちご・コーヒー味）	大豆由来のたんぱく質を含む（ミルク・コーヒー・バナナ・コーン・抹茶味）

電解質含量換算表（エンシュア・リキッド 250 mL）

まず**dL 換算**（250 mL＝2.5 dL）：

成分	1缶中（mg）	mg/dL	mmol/L	mEq/L
ナトリウム (Na)	200	80.0	**3.48**	**3.48**
カリウム (K)	370	148.0	**3.80**	**3.80**
カルシウム (Ca)	130	52.0	**1.30**	**2.60**
マグネシウム (Mg)	50	20.0	**1.64**	**3.28**
リン (P)	130	52.0	**4.20***	—

■海鳥・水鳥の給餌必要量は体重のおよそ何%くらいか？

一般的な目安として、成鳥の海鳥・水鳥の「1 日の総摂取量」はおおよそ**体重の約 10〜20%(魚食種で高く、穀食傾向で低い)**。

■成鳥の給維持餌量の目安 ： 定時の体重測定の数値で比較

魚食性の海鳥(カモメ類、カツオドリ類など)の多くの種でエネルギー需要が高く、魚やイカなど高カロリー餌を体重の目安 10〜20%/日 程度摂取すると推定されている(野外では活動量・水温で変動)。

水鳥 ： 水面採食カモ類・ガンカモ類などの草食〜雑食性のものでは、飼育下では代謝要求が下がるため、配合飼料や穀類の体重の約 5〜10%/日 前後から開始し、排泄状況と体重の変化を見ながら調整することが多い。

■EmerAid® Intensive Care(Lafeber / 米国):OWCN・IWRC 系プロトコールで標準的使用

鳥類救護では事実上のゴールドスタンダード

＜種 類＞ ●EmerAid Intensive Care **Omnivore 雑食性** ●EmerAid Intensive Care **Carnivore 肉食性**
●EmerAid Intensive Care **Piscivore 魚食性**

＜特 徴＞ • Mg・P・K を含むバランス設計 • refeeding syndrome を強く意識した配合
• 経腸(カテーテル・ゾンデ)投与対応

① 魚食性鳥類に最も適合する専用・準専用製品

■ EmerAid Intensive Care - Piscivore 極めて高価

形態:粉末(温水で溶解し流動食化)

適応:魚食性鳥類・魚食性爬虫類。

魚由来タンパク中心・高消化性・微量栄養素(電解質・ビタミン)を含む。

強制給餌・チューブ給餌に最適

✓ **油汚染鳥救護・重度削痩個体の初期給餌で第一選択**

■ EmerAid Intensive Care - Carnivore (Piscivore が入手不可時の代替)

注意点:肉食用のため脂質がやや高い。refeeding syndrome リスク個体では慎重に。

必ず希釈(1.5〜2 倍)して、流動食として使用。

② **緊急・代替的に使用されることのある製品(要注意)**

■ Hill's Prescription Diet a/d ： 高脂肪・高カロリー・**回復期後半向き、** 油汚染鳥の初期には不適

■ Hill's i/d Low Fat ： 低脂肪で比較的安全・本来は哺乳類用、 **必ず十分に希釈**し、短期間限定使用

③ **48-72 時間:徐々に増量**

給餌量は 50% → 75% → 100%と段階的に増やす。 電解質を 1 日 2 回測定できると安全性が高い。

● 衰弱・脱水個体の初期流動食(経口カテーテル):

1 回量として「体重の約 5〜7%/回」を上限とするプロトコールが多く、例として 1kg の海鳥では 1 回最大 50〜70ml 程度とされています。複数回に分けて、嗜好性と咽喉頭反射、嘔心の存在で微調整する。

④ **臨床での注意点 ： RFS を疑ったらすぐ行うべき対応まとめ**

給餌を中止して、採血、血液生化学モニタリング。 電解質の補正(特にリン・K・Mg)。 チアミン(ビタミン B_1)投与。

輸液で循環を安定化:高値で血液を希釈したい時は 5%グルコース液が適する。低値では検査の結果で電解質液を選ぶ。 心電図・呼吸状態の監視。 経時的な血液生化学モニタリング。

⑤ **野生鳥救護の現場でのポイント(OWCN・RSPCA・IFAW 標準)**

1. **油汚染鳥や海鳥はほぼ 100% RFS のハイリスク**
2. 受け入れ初期 48 時間は「安定化フェーズ」とし、給餌より循環と代謝の安定を優先
3. チアミンは初期から投与
4. 流動食の開始は少量から
5. スタッフ間で「RFS チェックリスト」を共有すると事故が減る

終わりに

Refeeding syndrome は、特に衰弱した海鳥・水鳥・猛禽類で非常に重要な救護上の課題である。

最も致死的な要因は **急激な低リン血症** であり、初期の輸液・電解質補正と段階的な給餌が何より重要である。

本稿の図版作成にあたり、ChatGPT(OpenAI)を補助的に使用しました。図版の内容および最終確認は筆者が行っております。

参考情報 (1)

1 各種ビタミンの維持必要量

●ビタミン A

家禽では維持必要量はおおむね 1,400〜6,000 IU/kg の飼料とされるが、体重不足では水溶性ビタミン A の経口補給により摂餌量と死亡率の改善が報告されている。(具体的な投与量は 1500 IU/kg 以上への増量など)。

小鳥・コンパニオンバードの臨床では、重度欠乏時にビタミン A 20,000 IU/kg 体重までの IM 投与＋経口補給が上限として示され、「欠乏の不足後は過剰症回避のため早期にペレット食などバランス食に移行する」ことが強調されている。

●ビタミン D3

インコ類などの維持必要量は、およそ飼料中 1,000IU/kg（飼料 1g 摂取あたり約 1IU）程度とされいる。

・ ニワトリにおける D 欠乏（くる病など）では、IM で 3,300 IU/kg 週 1 回、あるいは 6,600 IU/kg 単回などのビタミン D3 補給レジメンが提案されており、同時に資料中の Ca・P 比の確保

●ビタミン E

エキゾチックバードの飼料中ビタミン E 推奨量は 100～500 IU/kg 乾物とされ、家禽の 5～28 IU/kg と比較高めに設定されている。ブロイラーでは、熱下のストレスパフォーマンス改善に 250 mg/kg（約 250 IU/kg 相当）の飼料補給が有効とされ、不足・ストレス時には通常の維持量より高いレベルへの強化が行われている。

●ビタミン K（主に K1）

鳥類では欠乏単独の報告より、抗凝固剤中毒などで治療的なケースが多く、他動物種のデータから K1 2.2 mg/kg 皮下の初回投与、以降 1.1 mg/kg 12 時間毎というレジメが一般的に紹介されているが、鳥専用データは欠如している。

・ 不足が疑われる場合でも、経口・皮下での少量の補給と、**肝疾患や脂肪吸収障害など背景疾患の改善**が重視されており、長期の高用量投与は推奨されていない。

・ 脂溶性ビタミンは排泄が遅く、毒性のリスクが大きいため、種・体重・基礎飼料中のビタミン含有量と、欠乏の重症度（臨床症状＋血中濃度や肝機能）を踏まえ、「当面の治療的増量＋長期はバランスの取れた食生活で維持」という組み立てが推奨されている。

・ 猛禽類などの野生鳥の場合は、家禽・コンパニオンバードのデータをそのまま用いず、給与している餌（マウス・ヒヨコ・魚等）の栄養価と、目標とする血中 Ca/P や肝酵素値を見ながら、体重あたりの IU/kg・mg/kg を意識して逆算する必要がある。

参考情報 (2)

・RER とは、**Resting Energy Requirement（安静時エネルギー要求量）** のことです。

・RER の定義 ：「安静・絶食・体温維持に必要な最小限のエネルギー量」。

☞ 給餌開始量・給餌増量（step-up／stepwise improvement）を決める際の**基準値**として使われる。

●カロリー計算

全ての動物の一日の基礎代謝量(BMR)

・ 基礎代謝量 kcal=K×(体重)$^{3/4}$＝K✖□体重✖□体重✖□体重✖□√✖□√。

・ スズメ程度の体重 50g 前後の鳥には K=129、200g を越えるものには K=78。

●基礎代謝量(臨床的には≠PER) ： 体重別

30g・・・・ 9.29kcal,　40g・・・・11.53kcal,　50g・・・・13.64kcal,　60g・・・・15.63kcal,　100 g・・・・22.93kcal,

●維持代謝量(維持代謝量・MER)

・ 健康体を維持する為の活動エネルギーとして 25%が更に必要である。

●疾患別係数

＜減量中＞ 0.5～0.7　＜外科手術＞ 1.0～1.2　＜軽度の外傷＞ 1.0～1.2　＜重度の外傷＞ 1.1～2.0

＜成長中＞ 1.5～3.0　＜敗血症＞　1.2～2.0　＜火 傷＞　1.2～2.0　＜頭部外傷＞　1.0～2.0

減量中は理論値は上記のようであるが、体重の減少は極力ゆっくりの方が生体への影響が少ないので、0.9 を採用する方が良い。

●実際のカロリー計算 ： 基礎代謝量は臨床的には≠PER と見做される。

体重から基礎代謝量(臨床的には≠PER)の計算

・ 25%増の維持代謝量を求める。

・ 疾患別係数を乗ずる。

本州初のトキの放鳥、そして村本義雄氏の功績

全国愛鳥教育研究会 副会長　染　谷　優　児

■2026 年 5 月 31 日、羽咋市での本州初のトキ放鳥の現場にて

朱鷺保護の第一人者である村本義雄氏（以後、村本さん）には、2001 年より本会の顧問に就任していただき、様々なご指導を賜り、今も交流が続いています。

村本さんは、今年の４月に 101 歳の誕生日を迎えられました。そして、70 年にも及ぶトキ保護活動の成果として、地元の眉丈山（びじょうざん）にトキが再び舞い飛ぶという、長年の夢がかなうその日が近づいてきました。私は、村本さんの晴れの舞台となるその場に居合わせたい、そして、その風景を目の当たりにしたいと強く思いました。

しかし、式典の一般参加枠に応募したものの選外となり落胆したのですが、遠方からでも見られたらと考え直し、現地入りしました。すると 300m の距離はありましたが、同じ選外の方々といっしょに、放鳥会場正面の道路に陣取ることができました。

当日の天候はほぼ快晴の好天、風もほとんどなく、絶好の日和となりました。

予告どおり 15:25、２回に分けてケージの扉が開かれ、計８羽のトキが舞い上がりました。個体識別のために翼にペイントが吹きかけられていたので、カラフルな印象を受けましたが、野外で日の光に映える朱鷺色を目の当たりにすることができました。

放鳥後、村本さんは、テレビの取材に対して、「心が清々しいというか、トキがどんな思いで能登の空気を吸って羽ばたいていったのかなあと。本当にこの能登に住み着いてくれればいいがなあという、そんな気持ちで遠くへ飛んで行くのを見送っていました。」と口にされました。長年トキに向けて来られた、トキを思いやるお心がそのままに表れたお言葉だと思いました。

トキ放鳥の瞬間

舞い飛ぶトキの１羽

放鳥式とその前後の様子は、今もネット上に様々な情報として存在していますので、そのいくつかを紹介します。

〇能登地域トキ放鳥記念式典　放鳥式、石川県公式チャンネル

https://www.youtube.com/watch?v=AiInDHnp2Jw

放鳥式典がノーカットでまとめられています。全編 18:15 ですが、実際は以下のとおりです。

2:27 放鳥開始、１回目放鳥者が所定の位置につく（村本さんは左端）
4:46 １回目放鳥（5 羽）
5:18 ２回目放鳥者（能登の小学生）が所定の位置につく
7:04 ２回目放鳥（3 羽）
7:45 放鳥終了

〇【ニュースまとめ】6 月 1 日放送分 石川・羽咋市で本州初のトキ放鳥 半世紀ぶりの羽ばたき見守って など、テレビ金沢 NEWS

https://www.youtube.com/watch?v=bl73VxiVlzQ

放鳥されるトキが陸路、佐渡から前日に到着する様子、式典を前にした村本さんの前日当日の様子、一般参加者の様子、式典の様子、放鳥の様子などを、コンパクトにまとめています。

全編 17:44 ですが、当該部分は 0:00 開始、6:52 終了です。

〇石川県観光公式サイト ほっと石川旅ネット　朱鷺の舞う能登｜半世紀ぶりにトキが石川・能登の大空へ

https://www.hot-ishikawa.jp/blog/detail_747.html

朱鷺の特徴と歴史、なぜ放鳥の地に石川県・能登が選ばれたのか、朱鷺を観察するときのマナー、半世紀越しの願い・・・村本義雄さんが語る朱鷺と能登（インタビューのダイジェスト）

〇石川県観光公式サイト ほっと石川旅ネット　半世紀越しの願い・・・村本義雄さんが語る朱鷺と能登

https://www.hot-ishikawa.jp/blog/detail_755.html

インタビューの際の村本さんのお言葉を、ほぼそのままに再録したと思われる全文です。村本さんのトキとその保護に対する正直な思いと情熱と見識とが、そのまま言葉になって表れています。ぜひ、お読みいただきたいと思います。

■村本さんと中国の朱鷺保護活動

村本さんが中国の朱鷺保護活動に打ち込むことになったのは、日本産トキの絶滅がきっかけでした。環境省や保護団体が方策を模索している中、従前から朱鷺保護に情熱を傾けていた村本さんの動きは早かったです。そして、著書の「能登のトキ、1972 年刊」と「写真集　能登のトキ、1982 年刊」を持参したことで、トキの研究者として認められ、1991 年 8 月に朱鷺の生息する現地入りを果たしました。1993 年には NHK も現地入りをし、その様子が全国に放送されました。

その後、村本さんは現地の農民、役所の担当者、学校の児童や先生との交流を深め、トキ保護のために多大な資金援助を行い、絶大な信頼を得るに至ります。

1998 年、村本さんは春の叙勲の栄を受け、下賜された菊の御紋入り木杯と賞状の写真を持参して地元住民に報告したところ、その情報は中央政府に上がったものと見え、同年 11 月、時の江沢民中国国家主席の来日の際、一つがいのトキが天皇陛下に贈られるという思いもかけない展開になりました。そして、翌 1999 年 1 月に２羽のトキが佐渡に着き、そのトキといっしょに、中国の地元洋県から飼育主任１名も佐渡に入り６ヶ月間滞在、5 月にはひなが誕生という展開になり、ここから日本におけるトキの復活が始まりました。

この経緯については、後で紹介する書籍**「角地耕三、のとの大空にトキが舞う、能登印刷出版部、2026 年 5 月 20 日、ISBN978-4-89010-869-5」**にくわしく書かれていますので、ぜひお読みください。前述の「石川県観光公式サイト ほっと石川旅ネット　半世紀越しの願い・・・村本義雄さんが語る朱鷺と能登」の「中国との交流」の内容を裏付け、補うものとして重要です。

■村本義雄物語の必要性

佐渡の野生復帰も進み、今年 2026 年 5 月 31 日に本州での初の放鳥も行われました。ここに至るまでの関係各位の苦労の賜であることは言うまでもありませんが、そもそものきっかけをつくり、今日の成果へと続くその方向性を確かなものにしたのは、村本さんの壮大な夢と確たる見識によるものであると私は思っています。

しかしながら、地元石川県のそれは別として、最近の報道や様々な保護団体の説明からは、そのことがすっぽり抜け落ちているような気がしてなりません。最終的には国家間の約束でもあり、環境省はじめ数多の関係各位のご尽力によるものとは思いますが、民間外交の成果だなどと持ち上げるだけで、果たしてそれでよいのでしょうか。村本さんのトキに対する純粋な思いが、私財をはたいてまで国際保護鳥であるトキを守ろうとしたその意思と情熱が、中国の地元だけでなく、

ついには、中央政府の心まで動かして実現したということの重さを忘れてはならないと思います。いったん失った自然を回復させる、いったん絶滅してしまった生物を復活させることの難しさというものを、私たちはこのトキを例に深く学び、村本さんのお言葉にもあるように、同じようなことを繰り返すことのないようにする必要があると思います。

とは言うものの、村本さんの著作はじめ様々な記録を読めば、事実とその経緯を知ることはできても、携わった方々の思いや願い、当時の背景にまではなかなか理解が及びにくいものがあります。そこで、私はかねがね「村本義雄物語」が必要であると思っていました。

■角地耕三 著「のとの大空にトキが舞う」の出版

そうしたら、何と以下の書籍が放鳥式に間に合うように出版され、私も村本さんから１冊いただくことになりました。

角地耕三、のとの大空にトキが舞う、能登印刷出版部、2026 年 5 月 20 日、ISBN978-4-89010-869-5

拝読してみて、私の求めていたものは正にこれだと思いましたので、著者の角地耕三氏に手紙を書き、合わせて気付いた点を記して正誤表の案をお送りしました。そうしたら、角地さんから電話をいただき、出版社と相談して、第１版は正誤表付きで販売を継続するが、改訂版を追加でお出しになるとのことでした。

体裁は絵本で、ご自身の手になる優しさに溢れた挿絵と、子供でもわかりやすい平易な文章で構成されていますから、子供から大人まで幅広く読めるものになっています。そして、村本さんの思いや願いを深い敬意を以て角地さんが受け止められて形にしたものですので、両者の人柄が相まって、深く心に響くものがあります。皆様にもぜひお読みいただきたいと思います。

なお、この 10 月には北國新聞社から、村本さんのおそらく伝記だろうと思いますが、出版されるとのことです。こちらは、大人版としての価値が高いものになるのではないかと期待しています。

■村本さん　羽咋市名誉市民に

理由は以下の資料に書かれていますので省略しますが、2026 年 7 月 1 日、村本さんに羽咋市名誉市民証が贈呈されました。おめでとうございます。

〇広報 はくい No.890　2026 年 8 月

https://www.city.hakui.lg.jp/material/files/group/3/kouhuhakui202608.pdf

当該ページは P1～3 です。

「村本義雄氏の歩み（略歴）」も端的にまとめられています。

■トキの能登への定着を見届けるまでお元気で

地元の農家の方々は、佐渡の農家の方々から指導や助言をいただきながら、地道な努力を続けていらっしゃるとのこと。それでも、トキが安心して住める環境が整うまでには、まだ時間がかかるようです。石川県トキスーパーバイザーの村本さんのお仕事はまだまだ続きます。トキが能登に住み着くその日を見届けるまで、村本さんの益々のご活躍をお祈りしています。

シジュウカラについて

シジュウカラは、数ある野鳥の中でも、住宅地や都市部の周辺においてもいつでも観察することができる、私たちにとって最も身近な種ということができます。巣箱もよく利用してくれることから、子供たちにとってもスズメやツバメと並んで、一番馴染みのある鳥ということができるでしょう。

そのシジュウカラの学名は、ほんの 20 年程前までは *Parus major* となっていました。*Parus* は、もともとラテン語でカラ類の仲間の鳥のことを指し、また *major* はやはりラテン語で「より大きい」（比較級）という意味です。これは、他のカラ類の仲間に比べて少し大きいという意味も含んでいます。

それまでは長い間、ヨーロッパに生息しているシジュウカラ（胸が少し黄色みがかっているのが特徴）と同種とされていたのですが、その後の分類学上の研究により、それぞれ別種とされ、先の学名がヨーロッパの種に適用されたため、日本に生息するシジュウカラの学名は、新たに *Parus minor*（「より小さい」と言う意味）とされました。以前と逆の意味の単語が使用されたことに少々戸惑いもありましたが、これはやはりヨーロッパのシジュウカラと比べて少し小型であるということから付けられたようです。そして最近になって、今度は中東から東南アジアに広く分布していたハイイロシジュウカラ *Parus cinereus* と同じ種であるとされ、「日本鳥類目録 改訂第８版」においてもそれが採用され、今ではこの *Parus cinereus* が、シジュウカラの学名となっています（*cinereus* はラテン語で「灰色」という意味です）。

よって、最近になって二度も分類上の変更から学名も改められたわけですが、恐らく市中に出回っている鳥類図鑑の中には、上記の三種類の学名表記が混在している状況かと思われますので、それは上記のような要因によるものと理解していただければ幸いです。

なお、今後も多くの研究成果により、分類上の変更は少なからず行われるはずですので、その辺りの事情については、定期的にチェックしていただくとよろしいかと存じます。

（WRV事務局長　箕輪　多津男）

事務局日誌　2026.6.15～2026.9.16

＝＝＝　6 月　＝＝＝

18,19,25,26：東京環境工科専門学校生・野生動物救護実習（東京環境工科専門学校）［神奈川支部］　対応：皆川

22：第 82 回日本獣医師会 通常総会（明治記念館）　対応：小松、中川、髙橋

23：令和８年度第１回アライグマ・ハクビシン対策講習会（東京都庁）　対応：加藤

25：WRV ニュースレターNo.137 発行　対応：小松、箕輪、二階堂

27：日本野生動物医学会第 92 回理事会（Web 開催）　対応：加藤

28：令和８年度神奈川県野生動物リハビリテーター研修・更新講習会（かながわ労働プラザ）［神奈川支部］　対応：皆川

28：稲城市犬の飼い方講習会（稲城市中央文化センターホール）　対応：小松

29：環境省水鳥救護研修センター・日獣大学生見学会　対応：箕輪

＝＝＝　7 月　＝＝＝

01：ヒメアマツバメ・ヒナ救護に関する打合せ・リハビリテーター活動開始（厚木市文化会館）［神奈川支部］　対応：皆川

06：帝京科学大学・野鳥及び油汚染鳥救護実習（上野原キャンパス）　対応：箕輪

07~08：帝京科学大学・野鳥及び油汚染鳥救護実習（上野原キャンパス）　対応：皆川

09：帝京科学大学・野鳥及び油汚染鳥救護実習（環境省水鳥救護研修センター）　対応：皆川、箕輪、二階堂

12：日獣大学生・インターンシップ（犬猫・野生動物救護センター）［神奈川支部］　対応：皆川

13：東京都獣医師会・令和８年度理事会（東京都獣医師会会議室）　対応：中川、髙橋、小松

13：帝京科学大学・野鳥及び油汚染鳥救護実習（上野原キャンパス）　対応：箕輪

14~15：帝京科学大学・野鳥及び油汚染鳥救護実習（上野原キャンパス）　対応：皆川

16：帝京科学大学・野鳥及び油汚染鳥救護実習（環境省水鳥救護研修センター）　対応：皆川、箕輪、二階堂

18：第９回 JCVP 教育セミナー（Web 開催）　対応：新妻

18,25：神奈川県野生動物リハビリテーター・県内傷病施設見学会（金沢動物園）［神奈川支部］　対応：皆川

24,26：犬猫・野生動物救護センターにてリハビリテーター活動［神奈川支部］　対応：皆川

25~26：WJVF 第 17 回大会 2026（ホテルニューオータニ大阪）　対応：新妻

31：北海道弁護士会連合会定期大会記念ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ「北海道におけるﾒｶﾞｿｰﾗｰや大規模風力発電の問題」（Web 併用）　対応：小山

＝＝＝　８月　＝＝＝

01：シンポジウム「外国産野生動物の商業ペット取引におけるﾎﾟｼﾞﾃｨﾌﾞﾘｽﾄに関する国内外の状況」（Web 開催）　対応：加藤

01：令和８年度日本コウノトリの会・総会（オンライン）　対応：箕輪

01,03,16,28：犬猫・野生動物救護センターにてリハビリテーター活動［神奈川支部］　対応：皆川

06：環境省水鳥救護研修センターの運営に関する打合せ　対応：小松、皆川、箕輪

21：東京都獣医師会「笑って健康」「子犬・子猫流通調査」（新宿ルミネ・Web 開催）　対応：新妻

23：東松山市民環境会議～アライグマ対策講演会～（東松山市総合会館・Web 併用）　対応：小山

27：WRV 職員採用面接（環境省水鳥救護研修センター）　対応：小松、箕輪

27：東京都獣医師会・会員制度について（オンライン）　対応：新妻

28：令和８年度「ヒナを拾わないで‼キャンペーン」事業報告書提出（環境省）　対応：箕輪

30：埼玉西部アライグマ対策協議会活動報告会（東松山市民文化センター・Web 併用）　対応：小山

31：東京環境工科専門学校生・野生動物救護実習（東京環境工科専門学校）［神奈川支部］　対応：皆川

＝＝＝　９月　＝＝＝

01,14,15：東京環境工科専門学校生・野生動物救護実習（東京環境工科専門学校）［神奈川支部］　対応：皆川

04~06：第 32 会日本野生動物医学会大会（愛媛大学）　対応：加藤

06：日獣大学生・インターンシップ（犬猫・野生動物救護センター）［神奈川支部］　対応：皆川

08~10：第 169 回日本獣医学会学術集会（日本獣医生命科学大学）　対応：加藤、小松、箕輪

11：厚木市立玉川小学校２年生の学習指導［神奈川支部］　対応：皆川

11~14：日本哺乳類学会 2026 年度大会（キオクシアイーナ）　対応：加藤

野生動物救護獣医師協会　（ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ）**http://www.wrvj.org/**　**(E-mail)** **kyugo@wrvj.org**

NEWS LETTER No. 138　2026.9.25 発行

発　行：特定非営利活動法人　野生動物救護獣医師協会

事務局：　〒190-0013　東京都立川市富士見町 1-23-16 富士ﾊﾟｰｸﾋﾞﾙ 302

TEL: 042-529-1279　FAX: 042-526-2556

発行人：小松　泰史　　編集文責：小松　泰史　　編集担当：箕輪多津男